

..... 編集後記 .....

◆ 今月は今から11年前の平成3年、島原雲仙普賢岳で大火砕流が発生した月です。6月3日午後4時8分、成長した溶岩ドームが大崩落して火砕流が発生し、ふもとの上木場地区で43名の尊い人命を奪う大惨事になりました。今でもハッキリ覚えているのは、火砕流に巻き込まれ、体中灰だらけになってもがき苦しみながら、泳ぐような足取りでテレビカメラに向かってヨタヨタ歩いてくる消防団員(?)のテレビ映像です。

「火砕流」と言う言葉はしょっちゅう耳にし、「火砕流堆積物」は露頭で何度も目にしていたのですが、リアルタイムで火砕流を映像としてとらえ、そしてメディアによってテレビ視聴者に放映されたのは、おそらくこの時が始めてでしょう。その意味で衝撃的な映像でした。この映像と被害が、政府や自治体の重い腰をあげさせ、火山噴火への防災と危機管理が重要であることを決定づけたと言って良いのではないのでしょうか。

地質調査総合センターでは、地球科学情報研究部門が中心となって、噴火機構や火山体の構造や発達史の謎を解くため、雲仙火山の科学掘削を行ってきました。今月7日には、明治記念館で、地質調査総合センター記念講演会が開催されます。その場では、雲仙火山の掘削事業が地元と連携しつつどの

ように行われたか、またそれに対する島原市側の期待も講演されます。それらの内容はいずれ、ほかの講演とともに、地質ニュースで報告する予定です。

◆ 6月はいよいよサッカーW杯が開催されます。今月号がお手元に届く頃には、我が日本チームの戦績も判明しているとは思いますが、さて結果はどうでしょうか。熱しやすく冷めやすいのが我が国民の習性。W杯後の後遺症が心配です。

◆ 今月号は、1年半前に噴火した三宅島や現在の島の様子を表紙・口絵・本文でとりあげました。口絵にはまた、スキャナーを用いた岩石断面のカラー写真も載せましたが、「コロンブスの卵」とはこのようなことを言うのでしょうか。誰もが考えつきそうなことですが、誰かが始めなければ気がつかないと言う好例です。ほか、地理情報システムを用いた地熱資源の評価についての新しい計画、またインドネシア白亜紀付加体地質紀行は3回目となり、いよいよ佳境に入ってきました。

◆ (お詫びと訂正) 4月号の大分地域重力図の記事(p.29)の中で「古生代の変成岩類」としたものは、現在の年代論から判断すると「中生代」とするのが正しいこととなります。原稿チェックの段階で、見落とした点、著者の方々並びに読者にお詫びいたします。(吉田史郎)

地質ニュース編集委員会

委員長：吉田史郎

副委員長：谷田部信郎

委員：磯部一洋・関口春子・中島 隆・  
安川香澄・飯笹幸吉

連絡先：地質調査総合センター 地質標本館  
〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1  
Tel. 0298-61-3754  
Fax. 0298-61-3569

地質ニュース	第574号	2002年	6月号
	定価 ¥785 (本体価格 ¥748)	〒実費	
2002年6月1日	発行		
編集	産業技術総合研究所		
発行人	株式会社 実業公報社		
	代表者 林 光生		
発行所	株式会社 実業公報社		
	東京都千代田区九段北1の7の8 〒102-0073		
	Tel. (03)3265-0951 (代表)		
	Fax. (03)3265-0952		
	振替口座 00110-6-32466		
	麹町局私書箱第21号		
印刷	株式会社 エアフォルク		

© 2002 Geological Survey of Japan

●本誌は東京都の霞ヶ関政府刊行物サービスセンターおよびつくば市の友朋堂書店本店に常備してあります。また、最寄りの書店でも注文できます。

地質ニュースに関するご意見は編集委員会へ